

## 地方移住の実態とあるべき支援策

梶原 綾乃<sup>\*</sup>・山本 和博<sup>\*</sup>・胡 柏<sup>\*†</sup>

Ayano KAJIWARA<sup>\*</sup>, Kazuhiro YAMAMOTO<sup>\*</sup> and Bai HU<sup>\*†</sup>:

The Current Situation of Migrating to Local Areas and Policy Alternatives

### Abstract

The population of local areas in Japan is remarkably decreasing as an increasing concentration toward the district of Tokyo metropolis. However, the migration oriented to local areas is attracting the attention as a new trend induced from a new policy of regional vitalization. This research aims to clear the current situation, determinants of this trend, and further the effective policy alternatives for promoting it, by case studies from Usuki city, Oita prefecture. The results showed that the four factors, namely, the effort of local government in receiving migrants, the development of organic agriculture in this city, good administrative services, and the hospitableness of local people were the main reasons of attracting migrants. The policy alternatives aiming to promote the development of these measures could be effective.

**Key words:** migration oriented to local area, migrant, country life

### 1. 研究の目的と方法

我が国は人口減少が進んでおり、特に東京一極集中のため、地方では減少傾向が顕著である。政府は、「まち・ひと・しごと総合戦略」の中で、地方への新しい人の流れをつくることを目標とし、地方移住・定住が注目されている。

しかし筆者は、移住・定住の先行研究では、調査地域の移住・定住に関する取り組みの評価や改善点は論じられているが、移住・定住の決定要因の解明及び他の地域への活かし方の論述は少ないと考えた<sup>(注1)(注2)</sup>。そこで本研究では、地方移住の事例調査を行い、移住・定住の現状や決定要因を明らかにし、地方が移住・定住者を増やすためにあるべき施策を示すことを目的とする。それにより、移住先として魅力があるのはどのような地方か、また地方が移住・定住者を増やすには今後どのような施策やまちづくりが必要かを明らかにする。研究の方法として地方に移住した人に対して聞き取り調査を行う。事例として、大分県臼杵市に着目する。

### 2. 国および県の人口動向

まず、我が国の人口の動向を見ていく。2008 年から日本は人口減少が始まっている。2000 年の総人口は 128,057,000 人、人口増減率は-0.8%である。我が国は 2015 年以降も年々人口は減少し、2060 年には 86,737,000 人になると予想されている。次に、首都圏への人口の流動について見ていく。2010 年から 2013 年までいずれの年も東京圏への 60,000 人以上の人の転入、東京圏・名古屋圏・大阪圏を除く都道府県からの 60,000 人以上の転出が見られる。これらをふまえると、我が国は総人口の減少と東京圏への人口の集中により、地方の人口減少と流出が進んでいることが伺える。

大分県の人口は、2000 年の人口は 1,197,000 人であったが、2015 年の人口は 1,166,000 人であり、15 年の人口増減率は-2.5%である。よって、大分県は全国の中でも人口減少が大きいと言える。

一方で、大分県への移住者数は増加傾向にある。図 1 は 2011 年から 2017 年までの大分県への移住者数、世帯数、相談件数の推移を示している。

### 3. 臼杵市の概要と移住の現状

#### 3.1. 臼杵市の概要

臼杵市の人口は、2000 年に 45,478 人であったが、2005

2019 年 7 月 29 日受領

2019 年 12 月 10 日受理

\*愛媛大学農学部農業経営学教育分野 (†責任著者)



出典：大分県ホームページより筆者作成

年に 43,352 人、2010 年には 41,469 人と減少の一途をたどっており、現在の状況のまま推移すると、2020 年の人口は 36,131 人程度になると予測されている。

臼杵市の特色は、大分県内で有機農業が盛んであることである。臼杵市では、安全安心な農産物を消費者に届けるために、自然の土に近い完熟堆肥「うすき夢堆肥」などで土づくりを行い、化学肥料を使わずに栽培した農産物を市長が「ほんまもん農産物」として認証し、付加価値の高いブランド商品として販売している。現在臼杵市内の有機農業者は約 40 名である。市は今後さらに市内の出店店舗や朝市への出荷量を増やしたいと考えており、流通の強化を目指している。

### 3.2. 臼杵市の移住・定住の現状

臼杵市は、2018 年宝島社出版の田舎暮らし本で掲載された「小さいまち田舎ベストランキング」で総合部門 3 位、若者世代が住みたい田舎部門第 1 位、シニア世代が住みたい田舎部門第 2 位、子育て世代が住みたい田舎部門第 3 位と全 4 部門で上位ランクインをしている。小さいまちとは人口 10 万人未満の 565 の市町村が対象であり、同ランキングは移住支援策、自然の豊かさ、医療、子育て、災害リスク、移住者数などを含む 194 項目のアンケートを市町村に依頼し、田舎暮らしの魅力を数値化している。以上より、臼杵市は、今日移住地として注目すべきまちと言える。

臼杵市は 2014 年から移住・定住施策体制の確立を進めてきた。現在は、移住・定住相談、空き家バンクに関する業務を秘書・総合政策課が 6 人体制で行っている。移住支援としては、移住を考えている人に向けて、大きく分けて①補助金など各種支援制度、②空き家バンク、③移住前の体感企画の 3 つのサポートを行っている。

まず、①補助金などの各種支援制度についてである。

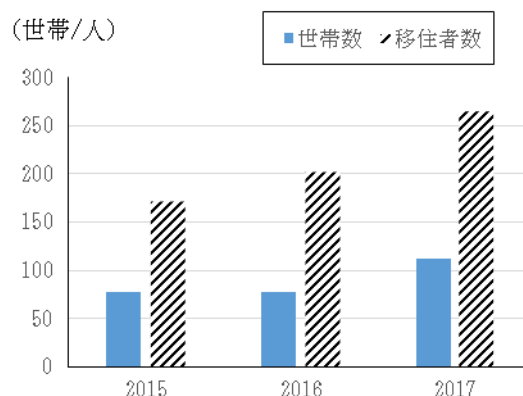


図2 臼杵市への移住者数・移住世帯数の推移

支援制度は、スムーズな移住支援のための補助金制度と若者・子育て世帯に向けた補助金制度がある。スムーズな移住支援のための補助金は、移住支援補助金、定住促進住宅取得補助金、若年・子育て世帯家賃補助金、Uターン支援住宅改修補助金の 4 種類ある。若者・子育て世帯に向けた補助金制度は、新婚生活応援補助金、新婚世帯家賃補助金、新婚世帯住宅取得補助金、三世帯家族定住支援住宅補助金、若年・子育て世帯定住促進住宅取得補助金の 5 種類ある。

次に②空き家バンクについてである。「臼杵市空き家バンク」とは、市内にある空き家の賃貸、売買などを希望する所有者から登録の申込みを受け、登録された空き家の情報を臼杵市のホームページや市役所窓口などで閲覧することによって、定住などで空き家の利用を希望する方に情報提供を行うシステムである。臼杵市における空き家バンクの登録物件数と成約数は、開始時の 2014 年から 2017 年まで毎年増加している。臼杵市の空き家バンク制度には、空き家バンク活用促進補助金と空き家改修補助金の 2 つの補助金がある。

最後に③移住前の体感企画についてである。臼杵市は移住希望者が、「移住者希望者向けモニターツアー」と「臼杵おためしハウス」によって移住前に実際に臼杵に仮住まいできるようにしている。「移住希望者向けモニターツアー」は、臼杵市への移住希望者が農村民泊により臼杵市を体感できるように設けた取り組みである。大体 2 泊 3 日程度で行う。定員は 5 組または 20 名程度である。2014 年度から開始し、今まで参加世帯の約 4 割が移住している。次に、「臼杵おためしハウス」は、臼杵市への移住を検討している方が一定期間滞在して、ゆっくりと臼杵の雰囲気や魅力を味わい、居住地域や住居などを選定できるように設置した移住体験滞在施設である。利用期間は最短 1 日～最長連続 7 日で、賃貸料は無料である。現在 60 を超える世帯が利用

表 1 調査対象者の概要

	A 氏	B 氏	C 氏	D 氏
年齢	43 歳	27 歳	30 歳	72 歳
性別	男	男	男	女
家族構成	妻・子供（5 歳）	妻・子供（7 ヶ月）	妻（24 歳）	子供 2 人（成人し自立）
前職	ディレクターなど	大学生	小・中教員	イタリア料理シェフ
前居住地	大阪府	大阪府	千葉県	千葉県
移住歴	3 年	3 年	1 年	3 年
現職	地域おこし協力隊	地域おこし協力隊	一般社団法人に在籍	イタリア料理店経営など

出典：聞き取り調査より筆者作成

しており、11 世帯 23 人が移住している。上記 3 つ以外にも、人的支援や様々な情報発信を行っている。臼杵市は、情報を知りたい移住希望者や、移住したが不安な気持ちを抱える移住者に寄り添った支援を提供するため、「移住・定住サポーター」を設置したり、臼杵市移住定住促進ポスターや移住ガイドブック、移住・就職支援サイト「うすき暮らしナビ」を作成している。また移住フェア、相談会へも積極的に参加している。東京都、大阪府、福岡県で開催や大分県主催、ふるさと回帰支援センター主催の移住フェアなど年間 10 回以上の参加をしている。複数回の相談者も多く、相談会とモニターツアーなどの連携もとっている。

続いて臼杵市の移住者に関して述べる。臼杵市の移住者数は 2015 年から 3 年間増加している（図 2）。

臼杵市の移住者は積極的にイベントを主催したり、参加したりしている。例えば「100 人スコール」は、様々な人が集い、つながりを広げる場をつくろうと臼杵市の移住者や団体が企画し、市内外で物品販売やワークショップを開くイベントである。Usuki Farmer's Market「ひやくすた」は臼杵市の有機農産物「ほんまもん農産物」を活かした朝ごはんや加工品を販売している。地域おこし協力隊の有機農業隊員を中心に、市内の有機農家や加工業者が集って、開催している。ほんまもん農産物を PR する場、消費者と生産者が顔を合わせて交流する場として広がりを見せている。

## 4. 事例調査

### 4.1. 調査対象者の概要

今回調査対象としたのは、臼杵市への移住者及び臼杵市の地域おこし協力隊員の有機農業隊員である A 氏と B 氏、社団法人に在籍する C 氏、イタリア料理店を経営する D 氏の 4 名である。4 名を調査対象とした理由は、まず臼杵市は有機農業に力を入れているので、

移住して有機農業を始める人を調査したかった。また農家以外の職の人の意見も聞き、臼杵市に移住した人が臼杵市に感じた魅力を色々な面から調査したかったためである。また 4 名とも定住の意思が固かったことにもよる。調査対象者の概要を表 1 に示した。

A 氏は、43 歳の男性である。高校までは大分で暮らし、卒業後は大阪府で音楽や舞台関係の仕事また飲食店で働いていた。そして料理をするうちに野菜に興味を持ち、家庭菜園を始め、結婚を機に農業に関する仕事にシフトしていった。まず大学で植物生理学を学び、次にコミュニティ FM 番組でディレクター兼リポーターとして、農家や直売所に関する週一番組を作成した。次に、農業の公共職業訓練学校にて有機農業の基礎や営農指針などを習得した。さらに社会福祉施設の 1 ha の圃場での 3 年間の野菜栽培の経験を経て、臼杵の地域おこし協力隊の有機農業隊員となった。現在は有機農業隊員となり 2 年になり、妻と 5 歳の子供と 3 人で暮らしている。

B 氏は、27 歳の男性である。出身地は大阪府である。ある有機農家の野菜を食べたときに感動を覚え、有機農業をしたいと思い始めた。そして有機農業について調べるうちに臼杵市が舞台となったドキュメンタリー映画を知った。そして臼杵市の雰囲気や有機農業の取り組みを知るため、実際に臼杵市に訪れ地域おこし協力隊の募集を知った。現在は有機農業隊員になり 2 年になる。隊員になるまでは農業の知識や経験が全くなかったが、現在は有機農家として自立するという意識を持っており、畑付きの新居を購入している。妻と 7 ヶ月

の子供と 3 人暮らしである。

C 氏は、30 歳男性である。出身は千葉県である。移住前は小・中学校の教員をしていた。青森県の地方で 3 年間中学校の教員、埼玉県の都会部で 3 年間小学校

表 2 移住決断の理由

A 氏	・有機農業を始めるため
B 氏	・有機農業を始めるため
C 氏	・自然の中で生活するため
D 氏	・晩年を田舎で暮らすため

出典：聞き取り調査より筆者作成

の教員として働き、地方と都会の公教育を経験した。そして今年の 4 月に臼杵市に移住した。現在は一般社団法人に在籍しており、脳科学と体験学習法を用いた人材育成事業を行っている。この事業は元から仕事関係で付き合いのあった臼杵市在住の知人の事業と協働している。臼杵市への移住のきっかけもこの知人に会うために臼杵市を訪れたことによる。脳科学を使う体験を大切にする講演活動や行政の人材育成の手伝いも積極的に行っている。一緒に移住してきた妻と 2 人暮らしである。

D 氏は、72 歳女性である。臼杵市では幼少期、数年暮らしたことがある。D 氏は結婚する前は大阪府の食品関係の会社で働いていた。結婚し子供を 2 人出産後、福岡県の調理学校に入学した。そこでイタリア料理が好きになり、イタリア料理に生きると決めた。銀座等で料理人として修業をし、夫の退職後は 2 人で、千葉県でイタリア料理店を経営した。このイタリア料理店は 8 年間経営したが、夫の病気により閉店した。そして夫の他界後、田舎への移住を決断した。現在移住して 3 年になる。2 年前から、臼杵市でイタリア料理店を経営している。

#### 4.2. 聞き取り調査

今回調査対象としたのは、臼杵市への移住者及び臼杵市の地域おこし協力隊員の有機農業隊員である A 氏と B 氏、社団法人に在籍する C 氏、イタリア料理店を経営する D 氏の 4 名である。4 名を調査対象とした理

表 7 移住前後の不安について

A 氏	・金銭面が不安だった
B 氏	・特に不安は感じなかった
C 氏	・小さな集落によそ者として入ることへ不安を感じた ・金銭面も収入がすぐに見込めないことによる不安があった
D 氏	・人間関係に不安があったが、市役所の担当の方が親切な対応をしてくれたため不安は緩和した

出典：聞き取り調査より筆者作成

由は、まず臼杵市は有機農業に力を入れているので、移住して有機農業を始める人を調査したかった。また

表 3 臼杵市を選んだ理由

A 氏	・市が有機農業の取り組みをしていたため
B 氏	・市が有機農業の取り組みをしていたため ・雰囲気が気に入ったため
C 氏	・知人が住んでおり訪ねた ・市役所の方の対応に安心したため
D 氏	・市が有機農業に力を入れているため

出典：聞き取り調査より筆者作成

農家以外の職の人の意見も聞き、臼杵市に移住した人が臼杵市に感じた魅力を色々な面から調査したかったためである。また 4 名とも定住の意思が固かったことにもよる。調査対象者の概要を表 1 に示した。

本節では聞き取り結果について、①移住に至る経緯、②移住後の実態、③移住・臼杵市に対する思い、④今後の課題・目標に分けて検討する。

#### ①移住にいたる経緯

まず、調査対象者が移住決断の理由である（表 2、表 3）。A 氏の移住決断の理由は、有機農業を始めるためである。妻のアトピーを気遣い自然食品店に通ったり、大学で植物生理学を学んだり、仕事で農家に関わる中で関心を持った。そして移住を決断してから有機農業のできる場所を探した。移住して有機農業を一から始めるのにいくつかの場所があったが、自分で金銭面の負担をしなければならなかった。臼杵市の有機農業の取り組みについては、大分県の就農相談会で知った。臼杵市では、地域おこし協力隊の有機農業隊員となることで収入を得ながら有機農家を目指すことができる。市が有機農業を推奨していることから「有機農業に理解のある人は多いだろう」と思いもあり、臼杵市への移住を決断した。

B 氏の移住決断の理由は A 氏同様、有機農業を始めるためである。大学の専攻は農業とは関係なかったが、1 年休学した際尋ねた場所で有機農家に出会い興味を持った。そして就職活動は行わず、有機農家になることにした。臼杵市の有機農業の取り組みについては、有機農業について調べる中で、臼杵市が舞台となったドキュメンタリー映画や本を知った。実際にモニターツアーに参加し、雰囲気も気に入った。最初は、「臼杵市の地域おこし協力隊に採用されなかったら、また他を考えればよい」という気負わない気持ちで臼杵市への移住を決断した。

表 4 利用した制度

A 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 移住支援補助金 (仲介手数料の補助, 引っ越し費用の 3 分の 2 の補助, 移住奨励金)</li> </ul>
B 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 移住支援補助金 (仲介手数料の補助, 引っ越し費用の 3 分の 2 の補助, 移住奨励金)</li> </ul>
C 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 移住支援補助金 (仲介手数料の補助, 引っ越し費用の 3 分の 2 の補助, 移住奨励金)</li> </ul>
D 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 移住支援補助金 (仲介手数料の補助, 引っ越し費用の 3 分の 2 の補助, 移住奨励金)</li> <li>・ 空き家改修補助金</li> </ul>

出典：聞き取り調査より筆者作成

C 氏は教員時代、都会と田舎双方の環境を経験し、現代社会の「体験」不足を感じた。自然の中で遊んだり人と触れ合ったりして色々な可能性を感じれば、社会の課題が解決するのではないかという思いを抱いた。教育をしていく中で、全ては「人生」ということを感じ、「生きる」を伝えるためには食糧を自分で獲得することや、火を使うなどあらゆる環境を整えたく移住を決断した。C 氏が臼杵市を選んだのは、知人が住んでおり訪れたことがあったのもあるが、市役所の方の手厚いサポートに安心したことが大きかった。

D 氏は夫との死別を経て、晩年一人で暮らすのに、田舎で暮らしたいという思いから移住を決断した。D 氏は移居前から食材のこだわりが強く、自宅の庭で無農薬栽培を行っていた。臼杵市は幼少期数年住んだこともあり、移住の候補地の一つだった。そして臼杵市が舞台となったドキュメンタリー映画や本を読み、有機栽培に力を入れている臼杵市のことが気に入った。そしてモニターツアーに参加し雰囲気も気に入ったため、臼杵市への移住を決断した。

次に初期費用と利用した制度をみる(表 4)。A 氏は、初期費用は失業保険や貯蓄で賄った。また補助金制度は、移住支援補助金を利用した。家賃も全額補助されている。B 氏は、初期費用は家族を頼った。また補助金制度は、移住支援補助金利用した。家賃も新しく引っ越すまでは全額補助された。C 氏は、初期費用は貯金で賄った。補助金は移住支援補助金利用した。D 氏は、初期費用は貯金で賄った。補助金は移住支援補助金を利用した。また空き家バンク制度も利用し、空き家バンク活用促進補助金、家のリフォームに空き家改

表 5 住居について

A 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 移住当初の家に住んでいる</li> <li>・ 現在新しい住まいを探し中</li> </ul>
B 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今年から借り家に引っ越した</li> <li>・ 空き家バンクで探すも良い物件がなく人伝手で見つけた</li> </ul>
C 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古民家に住んでいる</li> <li>・ 大きな畑と薪風呂があり、理想の暮らしが実現している</li> </ul>
D 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一度知り合いが紹介してくれた借り家に引っ越した</li> <li>・ 移住当初の家は使い道を検討中</li> </ul>

出典：聞き取り調査より筆者作成

修補助金を一部利用した。

## ②移住後の実態

まず、住居についてである(表 5)。

A 氏は移住当初に市が指定した家に住んでいる。家賃は全額補助である。地域おこし協力隊の任期が今年度までであるため、現在は新しい住まいを探しているが、未だ決まっていない。B 氏は、当初は市が指定した家賃全額補助の家に住んでいたが、今年から定住に向けて借り家に引っ越している。当初は空き家バンク制度を利用しようとしたが良い物件がなかったため、人伝で見つけた。C 氏は、インターネットを介した不動産の紹介で見つけた古民家に住んでいる。D 氏は、移住当初は空き家バンク制度を利用し購入した家に住んでいたが、知り合いに店の近くの借り家を紹介してもらったため、現在は借り家で生活している。

次に、ご近所づきあいについてみていく(表 6)。A 氏と B 氏は、同じ地区に住んでおり、地区の草刈りや

表 6 ご近所づきあいに関して

A 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地区の草刈りやお宮の掃除, みこしのイベントに参加する</li> <li>・ 近所に人たちと飲みに出かける</li> </ul>
B 氏	
C 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2 ヶ月に 1 回地域の地元行事に参加する</li> <li>・ 地域のお祭りに参加し、イルミネーションや大魚祭りの手伝いをする</li> <li>・ 近所の方から魚をいただいたり、ご飯をごちそうになったりする</li> </ul>
D 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市のイベントに参加する</li> <li>・ 地元の結婚式の料理やケーキを担当する</li> </ul>

出典：聞き取り調査より筆者作成

表 7 移住前後の不安について

A 氏	・金銭面が不安だった
B 氏	・特に不安は感じなかった
C 氏	・小さな集落によそ者として入ることへ不安を感じた ・金銭面も収入がすぐに見込めないことによる不安があった
D 氏	・人間関係に不安があったが、市役所の担当の方が親切な対応をしてくれたため不安は緩和した

出典：聞き取り調査より筆者作成

お宮の掃除、みこしなどのイベントに参加すると同じ回答をした。C 氏は地域の地元行事に参加している。仕事の都合を合わせるのが大変である。また地域のお祭りに召集され、イルミネーションや大漁祭りの手伝いもする。D 氏は、市のイベントに積極的に参加したり、地元の結婚式の料理やケーキを担当したりする。

### ③移住・臼杵市に対する思い

まず、移住前後の不安についてである（表 7）。

A 氏は、金銭面が不安だった。B 氏は、特に不安はなかった。C 氏は、よそ者が入るのが初めての地域だったため、心配していた。金銭面も収入がすぐに見込めるものではないため不安は感じていた。D 氏は、人間関係について少し不安だったが、市役所の担当の方が親切な対応をしてくれたため、不安が緩和した。

次に、移住して良かったことと苦勞したことについてである（表 8、表 9）。まず良かったこととして、A 氏は、周りの皆が元気であること、豊かな緑に囲まれていること、ストレスを感じないことを挙げた。

B 氏は、人の良さ、また秀でて良いことがあるというよりは不満がないことを挙げた。C 氏は、海、山、川がそろっており自然の循環を直接感じられることを

表 8 移住して良かったこと

A 氏	・周りの皆が元気であること ・豊かな緑に囲まれていること ・ストレスを感じないこと
B 氏	・人が良いこと・秀でて良いところがあるというよりは不満がないことが良いこと
C 氏	・海、山、川があり自然の循環を感じられること
D 氏	・自然に囲まれた生活を送れること

出典：聞き取り調査より筆者作成

表 9 移住して苦勞したこと

A 氏	・忙しい時期に朝から話しかけられること ・話を途中で遮るのが悪いため、長話をしてしまうこと
B 氏	・地域独特の話のスピード、間、リズムをつかむまで、自分の話したいことが上手く話せなかったこと
C 氏	・地域行事との付き合い方 ・仕事の都合を合わせるのが大変である
D 氏	・特に苦勞はない

出典：聞き取り調査より筆者作成

挙げた。D 氏は、自然に囲まれた生活を挙げた。

次に移住して苦勞したこととして、A 氏は、忙しい時期に朝から話しかけられることを挙げた。B 氏は、地域独特の話のスピード、間、リズムがあり、最初はなかなか自分の話したいことが上手く話せなかったことを挙げた。C 氏は、仕事の都合を合わせるのが大変であるため、地域行事との付き合い方に苦勞している。D 氏は、苦勞は特にないと述べた。

次に臼杵市の魅力についてである（表 10）。

A 氏は、近所の子供たちが挨拶をしてくれること、

表 10 臼杵市の魅力について

A 氏	・近所の子供たちが挨拶してくれること ・山・海・魚など自然に恵まれていること ・有機野菜を取り入れるなど学校給食に安心できること ・食育の取り組みが活発であること ・有機農業者が多いこと
B 氏	・人が良く近所の人の子供の面倒をみたりしてくれること ・海・山・肉・魚と自然や食が全てそろっていること ・行政が有機農業を推進していること ・堆肥センターがあり、市民が簡単に堆肥などを手に入れることができること
C 氏	・循環の街であることを感じられること ・先人たちの知恵の循環、水の循環、人付き合いの循環を感じる
D 氏	・納得のできる食材が揃うこと ・市民が移住者に優しく排他的なものがないこと

出典：聞き取り調査より筆者作成

表 11 自身の目標について

A 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自身の作った有機野菜で加工品をつくること</li> <li>・臼杵市の名物となる和菓子をつくること</li> </ul>
B 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3ha ほどの面積で有機農業をして家族が暮らしていける収入を得ること</li> <li>・栽培に専念し、主要な品目の量を増やすことで7, 8ha の経営</li> </ul>
C 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事の事業を通して臼杵の良さを感じてもらうこと</li> <li>・移住経験者の立場から移住して暮らしていく楽しさや良さを伝えていく中で、「移住の在り方」を伝えていくこと</li> </ul>
D 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現状を維持すること</li> <li>・体力の続く限り店を経営したい</li> </ul>

出典：聞き取り調査より筆者作成

山・海・魚など自然環境に恵まれていること、有機野菜を取り入れるなど学校給食に安心できること、食育の取り組みが活発であること、有機農業者が多いことを挙げた。B 氏は、人が良く近所の人の子供の面倒をみたりしてくれること、海・山・肉・魚と自然や食が全てそろっていること、行政が有機農業を推進していること、堆肥センターがあり、市民が簡単に堆肥などを手に入れることができることを挙げた。C 氏は、循環の街であることを感じられることと答えた。D 氏は、自然環境と自身が食材のこだわりが強いが、納得できる食材が揃うこと、市民が移住者に優しく排他的なものがないことを挙げた。

#### ④今後の課題・目標

まず、自身の目標についてである（表 11）。

A 氏は、自身の作った有機野菜で加工品をつくることである。また臼杵市の名物となる和菓子をつくることも目標である。B 氏は、まずは 3ha ほどの面積で有機農業をして家族が暮らしていける収入を得ることである。長期的な視点では、7, 8ha の面積を目指す。栽培に専念し、主要な品目の量を増やしたら実現不可能ではないと考えている。C 氏は、臼杵の暮らしに関する講演会や移住イベントを通して臼杵の良さを感じてもらうことである。また、今後移住者のサポートをする予定である。移住経験者の立場から移住して暮らしていく楽しさや良さを伝えていく中で、「移住の在り方」を伝えていきたいと考えている。D 氏は、現状を維持することである。体力が続く限り、お店を経営したい

表 12 不満や新しく作ってほしい制度など

A 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不満はないが、今ある制度の補助額が増加されると尚良い</li> <li>・夜の街灯などのインフラ整備不足</li> <li>・出かけるのに車が必須であること</li> <li>・周りに居酒屋がないこと</li> </ul>
B 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供に同じ世代が少ないこと</li> <li>・他所から来た農家へのサポートがもう少しほしい（コストがかかる際の支援、相互扶助のようなグループの作成）</li> </ul>
C 氏	・特に不満はない
D 氏	・特に不満はない

出典：聞き取り調査より筆者作成

と考えている。

次に、不満や新しく作ってほしい制度、市への要望についてである（表 12、表 13）。A 氏は、全額補助など今の制度にもう少し補助が増えるとよいと述べた。また夜の街灯などのインフラ整備不足、出かけるのに車が必須であること、周りに居酒屋がないことが不満である。B 氏は、子供に同じ世代が少ないことを挙げた。また、他所から来た農家へのサポートをもう少し行ってほしいと述べた。C 氏と D 氏は、制度に不満はない。

市への要望として A 氏は、臼杵市で子育てしたいと思える街づくりを望む。また便利ばかり追求はせず環境に配慮してほしいと感じている。B 氏は、有機農業や漁業を 1 つ 1 つ見直して行ってほしいと述べた。C 氏は、市へ要望というよりは、自分自身が貢献したいという思いが強い。D 氏は、臼杵市民の人が皆自分で積極的に行動を起こす街になってほしいと述べた。

表 13 市への要望

A 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臼杵市で子育てしたいと思える街づくり</li> <li>・便利ばかり追求はせず環境に配慮すること</li> </ul>
B 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臼杵市で大切にしていることをこれからも続けていくこと</li> <li>（有機農業や漁業の 1 つ 1 つ見直しなど）</li> </ul>
C 氏	・市へ要望というよりは、自分自身が貢献したい
D 氏	・臼杵市民の人が皆自分で積極的に行動を起こす街づくり

出典：聞き取り調査より筆者作成



## 5. 移住・定住の実態と今後あるべき支援策

### 5.1. 移住・定住の成功要因

本研究では、臼杵市を取り上げ、市の移住・定着に向けた取り組みを調査し、実際に4人の移住者と地域おこし協力隊員に聞き取り調査を行った。本節ではまず、本事例から重要であると考えられた①移住支援の取り組み、②市が有機農業に力を入れていること、③市役所の対応、④臼杵市の住民の人柄、⑤情報発信の5つごとにまとめ、移住・定住先に臼杵市が選ばれる要因を明らかにする。そして聞き取り調査をふまえて、地方の移住・定住の成功要因を考察する。

まず、①移住支援の取り組みについてである。A氏、B氏、D氏は最終的な臼杵市への移住の決定に、就農相談会やモニターツアーへの参加が影響している。市が移住支援として行うモニターツアーや臼杵おためしハウス、情報発信として行う移住フェアや移住相談会は、臼杵市が移住先の候補として挙げた移住希望者と臼杵市とのマッチングを可能とする試みになっていると言える。これにより、調べるだけでは分からない実際に臼杵市へ移住した後の生活をリアルにイメージができるようになり、移住希望者の移住地の最終決定を促すことができる。実際、B氏とD氏はモニターツアーに参加し、臼杵市の雰囲気が気に入ったことにより、移住の最終決断をしている。また、移住者が実際に移住したときに、移住前の想像との違いが大きいと、定住につながる可能性が低い。モニターツアーやおためしハウスは、移住前と移住後の移住者の感覚の誤差を小さくすることもできると考えられる。実際B氏、D氏は移住後に、臼杵市に対して「実際に思っていた暮らしと違った」という不満を述べておらず、今後の定住に意欲的である。よって、モニターツアーや臼杵おためしハウスの設置、移住フェアや移住相談会の実施は、移住先に選ばれる要因の1つと考えられる。

次に、②市が有機農業に力を入れていることについてである。A氏、B氏、D氏の移住決断の理由や臼杵市を選んだ理由は、臼杵市が市をあげて有機農業に取り組んでいることと深く関係している。移住して有機農業を始めたい移住希望者、食へのこだわりが強く有機農業が盛んな地域に移住したい移住希望者など、移住先選定の条件に「有機農業」がある移住者の呼び込みに成功している点をふまえると、市が有機農業を推進し色々な取り組みを行っていることは移住先に選ばれる要因の1つと考えられる。

次に、③市役所の対応についてである。C氏は臼杵市へ移住決断の理由に、市役所の方の対応を挙げてい

る。またD氏も市役所の方の対応により、移住前後の不安が解消されたと述べている。これらをふまえると移住者のサポートを行う市役所の対応は重要であると考えられる。今回聞き取り調査を行った4名と臼杵市役所の移住担当者は、非常に関係が密でイベント等普段からよく顔を合わせている。また臼杵市役所は、2018年度から移住・定住、空き家バンクに関する業務を秘書・総合政策課に一本化している。相談窓口が1つになったことから、今後より移住者と市役所の連携が取りやすくなると考えられる。移住希望者と市役所の担当者が良好な関係が築けていることや充実した補助制度は臼杵市の移住・定住先に選ばれる要因の1つであると考えられるので、市役所は引き継ぎ等をしっかり行い今後も移住希望者や移住者が満足できる対応を継続させていくべきである。

次に、④臼杵市の住民の人柄についてである。本研究の4名の調査対象者は、移住後の人間関係は良好である。A氏とB氏は、臼杵市に引っ越して間もないころは、地域住民独特の話し方や接し方に戸惑ったようだが、今は慣れている。また臼杵市の魅力や移住してよかったこととして、A氏は子供たちが挨拶をしてくれること、B氏は臼杵市民の人柄の良さ、D氏は臼杵市民が移住者に優しく排他的なものがいないことを挙げている。C氏も移住前は外部者として地域コミュニティへ参入することに不安を感じていたが、今は移住して1年未満だが地域住民と良好な関係を築いている。また、移住者が積極的に地域イベントを開催している環境や、移住者を含む移住・定住サポーターの存在は、移住者の移住後の人間関係の不安を取り除くことができているのではないだろうか。臼杵市民の移住者など外の人を受け入れる温かさや人々の距離が近く良好な人間関係をつくりやすいところは移住者が定住する要因の1つであり、移住後、地域の人々と親密に関わりたい移住希望者には、臼杵市は適していると考えられる。また移住者がイベントを主催したり、移住・定住サポーターになったりと、後輩移住者と人間関係を築きやすい環境も魅力である。

次に、⑤情報発信についてである。B氏とD氏は臼杵市を知ったきっかけとして、臼杵市が舞台となったドキュメンタリー映画や本を挙げている。臼杵市は、「家族みんなが、新鮮で安全な地元の食材を使った、我が家の味が並ぶ食卓を囲み、未来につながる生涯現役のまち」を目指しており、この未来像を市民が共有し、実現したいとの思いから映画『100年ごはん』の製作を企画し2014年に公開した。また2018年、2019



年の宝島社出版の田舎暮らしの本では、住みたい田舎ベストランキング各部門で上位にランクインしている。2018年度には、この本の影響により、全国放送の情報番組でも臼杵市の移住について特集された。メディアでの情報発信も臼杵市が移住先に選ばれる要因の1つであると考えられる。

以上より臼杵市が移住先に選ばれる要因は、①モニターツアーや臼杵おためしハウスの設置、移住フェアや移住相談会の実施により、移住希望者の移住地としての最終決断の促進や移住者の移住前後の感覚の誤差を小さくすることで定住の促進ができていること、②市が有機農業を推進し色々な取り組みを行うことで移住先選定の条件に「有機農業」に興味がある移住者の呼び込みができていること、③市役所の移住者への対応や補助金制度に移住者が満足感や安心感を得ていること、⑤メディアでの情報発信により、臼杵市を知らなかった移住希望者に同市を知る機会を与えることができることだと考える。また③や④臼杵市民の移住者など外の人を受け入れる温かさや移住者が移住後のつながりを持てる場があることにより移住者が定住することにつながっているのだろう。本研究の4名の調査対象者はいずれも定住の意思が見られた。4名ともこれから臼杵市で生活するビジョンが明確にあり、今は目標に向けて歩んでいる。よって本研究で調査した4名は、移住・定住の成功した事例だと言える。そこで、臼杵市が移住・定住先に選ばれる要因をふまえ、筆者は本事例の移住・定住の成功要因は①から⑤のような要因が結びついたからではないかと考えた。本研究の調査対象者4名が定住する意思が固められたのは、移住前に掲げた理想に近い形で今生活できており、新しくできた目標を臼杵市に住んでいると実現できそうだと感じられているからだと思筆者は考える。臼杵市は、移住先に選ばれる要因で示した「有機の里」「充実した支援制度」などの魅力をメディアや全国での移住フェアで発信し、移住希望者に臼杵市の存在や魅力を知ってもらうことに成功している。そして、モニターツアーやおためしハウスで臼杵市を移住先候補としている移住希望者に移住後に近い体感をしてもらうことで、臼杵への移住の最終決断と移住前後の思い違いを少なくし確実な定住を促している。重要なことは、移住希望者が自分の理想が叶えられる地方を見つけられることである。移住前の理想とのずれが小さいほど定住に結びつくと考えられるためである。本研究の臼杵市の移住・定住の成功要因をふまえると、地方が移住促進のために行うべきことは、①移住制度の充実や独自の

町の魅力をつくることで、移住希望者が移住したいと思える街づくりをすること、②情報発信により、その街及び町の魅力を移住希望者が知る機会をつくること、③移住フェアやモニターツアーなどの体感企画を行い、その地方に興味を持った移住希望者が移住を決断できるようにサポートすることである。そして移住者に定住してもらうために市役所を中心とした移住後の移住者へのアフターフォローもしっかり行うべきである。

## 5.2. 今後の課題とあるべき支援策

これまで、移住・定住先に臼杵市が選ばれる要因を明らかにし、聞き取り調査をふまえ地方移住・定住の成功要因を考察してきた。一方で調査対象者4名の苦労したことや要望などをふまえると、今後臼杵市が更に移住・定住者を増やすための課題も見えてきた。本節では移住者を増やすための課題を①金銭面、②空き家バンク、定住者を増やすための課題を③地域行事との関わり、④子育て世代及び子どもへの配慮、⑤有機農業就農者として移住する人への補助と考え、それぞれについてのあるべき施策を考察する。

まず、①金銭面についてである。移住にかかる費用の補助や空き家バンクなど住居に関する制度にA氏、B氏、C氏、D氏不満はないことから、臼杵市の移住者への補助金制度はある程度充実していると言える。しかし、初期費用のすべてが補助されるわけではなく、補助金の給付も後払いであることから、移住前にある程度の貯金は必要である。実際A氏とC氏は移住前に実際金銭面の不安があった。よって、移住者の金銭面の負担をどう軽減するかは今後も課題であると言える。

次に、②空き家バンクについてである。空き家バンクの登録物件数と成約件数は増加しており、成果が挙げられているが、今回の調査対象者は物件探しに苦労している。A氏は現在定住に向けて

物件を探しているが、自身の求める条件に合う物件はまだ見つかっていない(2018年11月現在)。B氏は新しく引っ越す際に空き家バンクで良い物

件が見つからず、最終的には人伝で見つけている。C氏は空き家バンクで視察後、インターネットを介した不動産で物件を見つけている。移住希望者は暮らしに対する理想が幅広く、全てに合う条件の物件の存在自体が難しくはあるが、空き家バンクで条件の合う物件探しがよりできるようになった方が良いだろう。

次に、③地域行事との関わりについてである。C氏は、地域行事との付き合い方に苦労している。A氏やB氏も地域のイベントに参加していることから、臼杵市に移住した際は地域ごとのイベントに参加すること

になる可能性が伺える。そこで移住者が移住後に地域イベントが負担にならないようなサポートをどうしていくかは今後の課題である。

次に、④子育て世代及び子どもへの配慮についてである。A氏とB氏は、臼杵市に対する不満で子供に関することを述べている。A氏は街灯がなく子供が遅くまで部活が行えないこと、B氏は子供に同じ世代がおらず同世代の交流が少ないことを挙げた。またA氏は、市への要望として子育てしやすいと思える街づくりを挙げている。田舎のインフラ整備不足や子供の割合が少ないことによる子育て世代の移住への懸念への対処は、今後の課題であると言える。

次に、⑤有機農業就農者として臼杵市へ移住する人への補助についてである。B氏は臼杵で新しく有機農業を始める際、ビニールハウスの導入など費用がかかる場合の支援、また地元の有機農家たちとの相互扶助のようなグループの作成を望んでいる。臼杵市が今後有機農業を拡充していく方針であることもふまえると、有機農業をはじめ移住者への制度が不十分であることは今後の課題である。

以下、①から⑤の課題に対してあるべき支援策をそれぞれ考察する。

第一に、移住希望者が過去の移住者に金銭面の相談ができるよう市が仲介することである。現在臼杵市は財政的にこれ以上補助金を増やすことは不可能だと考えられる。そこで、臼杵市が設置している移住・定住サポーターの方々により精神的なサポートをする。実際の移住者の移住・定住サポーターも存在するため、移住希望者で金銭面に不安を抱える方が移住したとき境遇の近かった移住サポーターに相談できるよう、市が仲介できれば良いのではないかと考える。直接会うことができなくても、移住・定住サポーターのホームページを作り、メール等での相談を受けられるようにすることも有効だと考える。また既存移住者が使用した補助金と実際にかかった初期費用などを年代や世帯別にデータとし蓄積し、移住希望者に近いデータを市が提供できると良いと考える。

第二に、空き家のリノベーションの専門家を雇うことである。臼杵市は、空き家バンク制度は登録物件数、成約数ともに増加を続け、成果を上げている。しかし今回の聞き取り調査では、A氏、

B氏、C氏、D氏いずれも空き家バンク制度で理

想の物件が見つけれなかったり、知人の紹介でより良い物件を見つけたりしている。費用も手間もかかるので、出来れば移住する際に理想に沿った住居を見

つけることが望ましい。そこで、移住希望者の理想に沿った空き家のリノベーションを専門家が提案すればよいのではないかと考える。その際、完成予想図、間取り図、空き家バンク制度の空き家改修補助金を用いてかかる費用等を提示する。また、自分で作ったり修繕するDIYの相談にも応じるなどしても良いと考える。

第三に、臼杵市内の中でも地域ごとのイベント等や土地柄の特色を移住希望者に事前に提示できるようにすることである。C氏は地域のイベントを負担に感じており、また移住後その地域になじめるか不安に感じていた。C氏のように、田舎の町の地域ごとの行事などは都会からの移住者などには負担になる可能性がある。また地域になじめるか不安な移住希望者も多いと考える。そこで、市が予め地域ごとのイベントや参加の義務、おおまかな土地柄の特色を把握し、移住希望者に提示することで、臼杵市の中でも自分にあった地域を選択でき、移住後に「思っていた暮らしと違う」という思いをする移住者を少なくすることにつながるのではないかと考える。また土地柄などを伝えることで、移住前の地域になじめるかという不安の軽減にもつながると考える。

第四に、移住してくる子どもたちへのサポートを充実させることである。実際A氏やB氏からは、子供のことについての心配事がいくつか聞き取れた。移住希望者むけのモニターツアーなどで地元の子供たちの交流の場を作ることで、子供の引っ越しへのストレスの軽減を図れると考える。モニターツアーは開催ごとにテーマを設定しているが、子連れの移住者を対象とした「地域の子どもと交流編」を企画するのも良いと考える。またB氏のように移住後の同世代の子どもとの交流の減少を不安視する移住希望者もいると考えられるため、臼杵市内外問わず近隣の他地域の子供たちの交流の場もつくるべきである。交流地域を広げ子供たちが多くの同世代の子と遊んだり、自然の中で何か体験ができたりするような都会では体験できない企画やイベントを行うべきだと考える。また中学生以上の子どもも土日に同じ部活動の学校間で合同練習を行うなど、地域の同世代と関われるよう近隣の学校同士が連携をとると良いと考える。平日に部活できる時間が短い分、休日は充実した活動を行うことができる。子供にとって魅力的な街であることを発信すれば、子育て世代からの関心も高まるだろう。

第五に、移住して新規で有機農家になる人への補助制度やコミュニティづくりである。現在臼杵市は有機の里づくりに力を入れており、有機農業隊員の地域お

こし協力隊も積極的に採用している。今後臼杵市で有機農家を目指す人が増えてきているため、実際に有機農家となった後のフォローも力をいれるべきである。B 氏も望んでいたように、臼杵市で有機農業をはじめの人への初期費用の補助、また臼杵市の有機農業者でコミュニティを作り、相互扶助や技術の共有の場をつくるべきである。そうすると、有機農業を希望する移住者の増加や臼杵市の有機栽培の技術の向上、臼杵市の有機栽培で生産した農産物「ほんまもん農産物」の流通規模の拡大につながると考えられる。

以上が本研究での事例分析から、臼杵市が移住・定住者を増やしていくために今後必要だと考えられる支援策である。移住希望者のニーズは様々であり、それに答える制度作りは困難を伴うものの、本研究で提示した支援策が、臼杵市において更に移住・定住者を増やすための一助となれば幸いである。

(注 1) 垂水亜紀, 藤原三夫, 泉英二「徳島県における定住促進政策の展開と成果」『Journal of Economics』Vol.46 No.1 (2000)

(注 2) 大島直人, 中本英里, 山本和博, 胡柏「I ターン就農者の定着過程と支援方策」『愛媛大学農学部紀要 62 号』(2017)

## 参考文献

- Hayes, C.R., and Carbone, E.T. (2015) Food Justice: What is it? Where has it been? Where is it going? *Nutritional Disorders & Therapy* 5: 1-5.
- エリック・シュローサー著・楡井浩一訳 (2001): ファーストフードが世界を食いつくす. 草思社, 7-381.
- グレッグ・クライツァー著・竹迫仁子訳 (2003) デブの帝国. バジリコ株式会社, 1-261.
- 磯田宏 (2011a): アメリカ穀作農業の構造変化ー工業化農業の到達と模索. 松原豊彦・磯田宏・佐藤加寿子著. 新大陸型資本主義国の共生農業システム アメリカとカナダ. 農林統計協会, 11-85.
- 磯田宏 (2011b): 北米における共生農業の模索ー新生代農協と CSA を中心に. 松原豊彦・磯田宏・佐藤加寿子著. 新大陸型資本主義国の共生農業システム アメリカとカナダ. 農林統計協会, 176.
- 国土交通省「平成 26 年度国土交通白書」(2019 年 1 月閲覧) <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h26/hakusho/h27/pdfindex.html>
- 総務省統計局ホームページ (2019 年 1 月閲覧) <http://www.stat.go.jp/data/index.html>
- 内閣府「平成 24 年版 高齢社会白書」(2019 年 1 月閲覧) <https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/index.html>
- 総務省「平成 27 年版情報通信白書」(2019 年 1 月閲覧) <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h27.html>
- 内閣官房・内閣府 総合サイト「みんなで育てる地域のチカラ 地方創生」(2019 年 1 月閲覧) [http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/policy\\_index.html](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/policy_index.html)
- 大分県ホームページ (2019 年 1 月閲覧) <http://www.pref.oita.jp/>
- 臼杵市役所ホームページ (2019 年 1 月閲覧) <http://www.city.usuki.oita.jp/>
- うすき暮らしナビ (2019 年 1 月閲覧) <https://usuki-job.com/>
- 臼杵観光情報協会ホームページ (2019 年 2 月閲覧) <http://www.usuki-kanko.com/>
- 全国移住ナビ (2019 年 2 月閲覧) <https://www.iju-navi.soumu.go.jp/ijunavi/>
- 映画「100 年ごはん」ホームページ (2019 年 2 月閲覧) <http://100nengohan.com/>
- 宝島社「田舎暮らしの本」(2018)
- 宝島社「田舎暮らしの本」(2019)